



男勝りなスレンダー-褐色
短髪筋肉女戦士な相棒が
淫乱な巨乳色白ツインテ
ムチムチ女娼婦に調教された

基本CG22枚
全162ページ

「おーい、なにぼーつとしてんだ？」





「全く、これから迷宮に潜るって時に
寝ぼけてるのか？」

「しっかりしてくれよ？
頼りにしてるんだからさ」


「じゃ、行こうぜ？
ま、俺達なら楽勝だよな」



「う……………」

目を覚ますと、見知らぬ部屋にいた
ここがどこなのかも、どうしてここで眠っていたのか
記憶があいまいで思い出せない……


「おや、お目覚めですか？」



突然目の前に現れた悪魔に対して
咄嗟に武器を構えようとして気付いた
拘束されていて、動けない……

「いきなり攻撃なんてしませんから
そんなに警戒しないでくださいよ」

「ここはどこで、お前は何者だ？」



「おや、覚えていないのですか？
うーん、ボロボロにやられちゃった
後遺症ですかね？」

「ここは迷宮の中です、ほら
よく思い出してみてください」

「……………」



悪魔にそう促され

俺は自分の記憶をたどり始める

迷宮……そうだ、アイツは……

俺は確か……同じ宿で寝泊まりしてる

相棒の部屋に行って……

「おーん、超おもしろかー？」

「おう、どうぞー」

「よう、どうした？」

「おま……人を部屋に入れる時は服を着ろって
いつも言ってるだろ？」



俺の相棒、アレス。見ての通り粗雑な女だが、見ての通り腕は立つ奴だ



「あー、そうだったな、悪い」

(しかし……いつ見ても
いい身体してるな……)



ちなみに、コイツの本当の名前は
アレスではなく、一文字違いの、アリスなのだ
が
そう呼ぶと当然キレる

それでも、俺に自分の本当の名前を
教えてくれた時は嬉しかった





「ほら、これでいいか？
で、なんの用なんだよ」

「明日の準備は済んでるか？
お前は用意が雑だからな」

「なんかあつたら
その時は尻拭い頼む」

「オイオイ、お前な……」




そうだ、そんな、他愛ない話を
したんだ。で、次の日……



「ここが入口か」





俺達はここらでも最難関と呼ばれる
迷宮の前にいた。

そうだ、さっき夢で見たのはこの時の事だ

「おい、なにぼーつとしてんだ？」





「全く、これから迷宮に潜るって時に
寝ぼけてるのか？」

「しっかりしてくれよ？
頼りにしてるんだからさ」

「じゃ、行こうぜ？
ま、俺達なら楽勝だよな」




A muscular anime character with short, spiky white hair and a single red eye. He is shirtless, showing a very well-defined physique with prominent muscles. He is wearing a black choker and a black sash or loincloth. He is holding a sword with a dark hilt and a silver blade. The background is a blurred outdoor setting with a blue sky and some structures.

お互いを鼓舞する意味も込めて
軽口を叩きあってから、俺達は
迷宮に乗り込んだ、そして……



圧倒的な力を持つ迷宮の主である悪魔に
呆気なく負けた



動かない身体に鞭打って必死に伸ばした自分の手と
首根っこを掴まれて持ち上げられる気絶した相棒
これが、意識を手放す前の最後の光景だ



俺達は失敗したんだ……




「思い出された様子ですねえ」

「ま、まさかアレスはもう……」

「心配しなくてもちやんと生きてますよ♥
アリスちゃんの様子を知りたいですか？」

「あ、ああ……」



この悪魔の目的がわからない。それでも
会いたいかと問うてきた時のこの女悪魔の
その邪悪な笑みで、俺は察するべきだった

「では、どくどく♥」



A character with long, dark purple hair and a white, form-fitting outfit is holding a large, pink rectangular mirror. The mirror is tilted, and the character's reflection is visible within it. The background is a dark, solid color.

差し出された鏡の向こうに映る光景は
俺にとっては最悪のモノだった

「ふっ、ふっ……アリスの処女マンコ
ぎちぎちに締め付けてきて気持ちいいよ
鍛えてる女は違うな」

「うるさい……っ黙ってやれ……」

「恥ずかしがる事はない。本当は私に
一目惚れしたんだろう？その証拠に
こうして大切な処女までくれたじゃないか」



「くっ、こんな紋章刻んで無理矢理服従させておいて…よくもそんな事を…っ」

「そして、大事な相棒を人質に取られている。絶対服従というわけだ」



「さあ、初めての申出しだ
ご主人様の精液をしつかり
搾り取るんだぞ……っ」

「だれがご主人様だっ、くそっ
絶対に倒して……」

ドクドクッ

ドクドクッ
ドクドクッ

ドクドクッ
ドクドクッ



「はあ、はあ……っ
な、なんだ……今の感覚」

「淫紋の効果だよ」

「それは人間に服従を強いる術だが
同時に人間を淫乱に変えていくんだ
外見的、内面的共にね」



ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

「そしてその力は私の精液を注がれるとより強くなる」

「今味わっている感覚は淫紋が発揮している証」



「アリスちゃんがエロエロな女の子になっっちゃうのが楽しみだ」

「ふざけるな……こんなもので自分を失ってたまるか……!!」

「ビビビ……その意気だ
寧ろそうでなくては楽しくない
最後にどうなるか、楽しみだね」



ビビビ

ビビビ

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク




相棒が受けた屈辱的な仕打ちを見て
俺の怒りは一瞬で沸点を超えた



「お、お前らよ〜も〜り〜!」

「どどど、いっか〜ん♡」



がむしやらに暴れるが、がっちりと
施された拘束は俺をその場から動く
事を許さなかった

「グソッ!! 絶対許さねえぞ!!」

「初日からこんなに怒っていたら
持ちませんよお?」



「調教はまだ

始まつたばかりなんですから♥」





「始まったばかり」
その言葉に青ざめる

俺達が入ってしまったのは
まさに出口のない迷宮だった



「さあアリス、今日も
娼婦になる為のお勉強をするんだよ」

「……俺をその名前と呼ぶな」

「ふふ、威勢がいいのは結構だが
相棒君の命とその淫紋、この二つが
ある限り、君に拒否権はない」

「くっ……勝手にしろっ！」



「では遠慮なく、ふうふうっ」

「う、くっ……っっ！」

(な、なんだこれ……昨日と
感覚が違う……っ?)

はぁ
はぁ
はぁ



「っ、はあっ、はっ、はあっ…
ま、まで……っ
何か、変な感じが……んっ♡」

「その感覚はアリスの身体が私の
モノに馴染んできている証拠だ
これからどんどん気持ちよくなるぞ」

「うそだっ、こんな、あっ♡」



「何かが身体から湧き上がってくるね？
それが絶頂、イクと言う事だよ」

「ヒヒ……さあ、ご主人様と
一緒にイキなさい。可愛くイクところを
ご主人様に見せるんだ」

「うああっ、くそっ、誰がそんなっ
そんなところ、見せたくないっ♥
やめ、あ、あ、ああっ♥」





「初めての絶頂はどうだった？」

「はあ、はあ、はあ……♡」

「惚けて返事もできないか。けど
まだまだ休ませないよ。たくさん
イキ顔を見せてもらうからね

「や、やめ……ああっ♡」

「ん、ふう、んぐっ……っつ」

「一生懸命枕かみしめて
感じるの我慢してるのかな
ふふふ、好きにするといい」

「そういう娘をわからせるのも
嫌いじゃないからね」



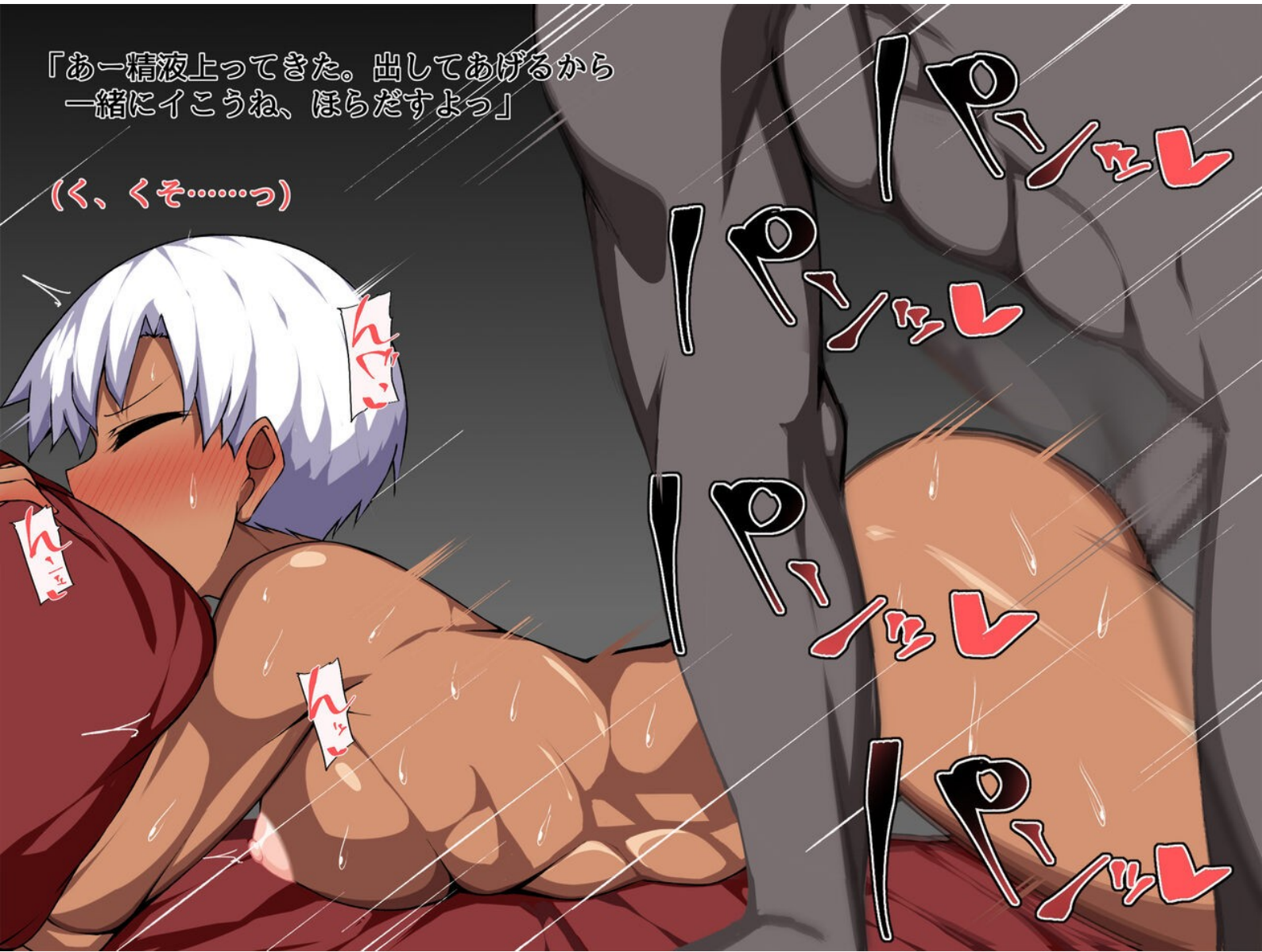
「ほら、声が漏れちゃってるよ？
気持ちいいのかな？気持ちよかったら
声出してもいいんだよ」

「ふーっ、ふーっ♥」



「あー精液上ってきた。出してあげるから一緒にイこうね、ほらだすよっ」

(く、くそ……っ)





「ふー……っ♡ふー…っ♡」

「頑張って我慢したのに
いっぱいイってしまったね
可愛かったよ」





「アリスちゃん、あつさり
イカされちゃいましたね」

「外道が……っ」



「こわーい♥そうだ、一つ良い事を教えてあげましょう
ご主人様はあれで飽きっぽい方なんです」

「いつまで経っても、自分に惚れこまない

女性に対してはその内興味を失ってしまうんですよ」

「アレスちゃんがご主人様に心を許さなければ、
いずれは貴方ともども捨てられるでしょうね
つまりそれは、この迷宮からの解放という事です」




それは一筋の光明だった
耐えきれば、解放される……

アレス、なんとか、なんとか耐えきってくれ……！

（ま、それもなるべく長く楽しむ為の
スパイスでしかないんですけどね）





悪魔の責めは
自分から手を出す事にとどまらず
アレスに自信への奉仕を強要させ始めた

断れば俺に危害が加わると脅され
アレスは従う以外の選択肢がない

俺は自分で自分を手にかける事も
出来ず、ただ彼女が耐えきるのを
祈るしかない



「さあ、教えたとおりにやるんだ
上手にできないと……わかってるね？」

「わ、わかったから
相棒には手を出すな」



「ん……ちゅっ」

「そう、まずは先っぽに愛情込めて
キスするんだ。言った通りにできて
偉いね」



「口すぼめて、頭を前後に動かして
チンポをしごくんだ、ああ、上手いよ」

(くそっ、人質さえ取られて無けりや……
こんな、こんなものを……♡)

「出してあげるから、全部飲むんだ。いいね」



ヒュルルル

ジュルルル

んんっ!

「んんっ!？」

「こぼさずに全部ごっくんしなさい」

「ん……コクツ、コクツ……♡」



「上手にできて偉かったね
ご主人様の精液はどうだった？」

「こ、こんなもの、不味いに
決まってるだろ……♡」

「その割には顔がうっとりしてるね
本当は美味しかったんじゃないのかい？」

「そんな……♡そんなわけないだろっ」



「アリスちゃん、いっぱい精液飲まされちゃいましたね
これまでのエッチで子宮に出された量と合わせると……
ふふ、そろそろ面白いものが見られると思いますよ♡」

「貴方もそろそろ退屈してきていたでしょう？
楽しみですね♡」



誰が退屈なんてするか…と言い返す気も起きなかった

そもそもコイツは俺の言葉など聞いているようで聞いてないのだ

そうして怪しげに、しかし楽し気に言った

女悪魔の言葉の意味を、俺は翌日知る事になる



そうしてその日見せられたアレスの様子は
その女悪魔の言葉通り、何か違っていた

痛い、というよりは身体に強烈な
違和感を覚えているが故の
苦し気な表情だった

「か、身体が熱い……
オレに何をした……っ!」

「淫紋を刻まれ、体内に私の精液を
一定量摂取した女はそうなる
さあ、早くその瞬間をみせてくれ」



「あああ………っ！」

「あーっ」

「あーっ」



「あああ.....っ!」

「あーっ」

「あーっ」



「ビビ……素晴らしい。女性らしい
身体になったなアリス」

「な、なんだこれ……!!
戻せ、戻せよ……!!」

「何故そんなことをする必要があるの?
こんなに素晴らしい身体なのに」

うふふ

うふふ

うふふ



「あ、んっ♡さ、やめ、触るなっ♡
んあああっ♡」

ゴクッ

じゅわん

ゴクッ

「感度も抜群。やはり君には素質がある

これからはこの胸で私を楽しませてくれ」

ゴクッ

じゅわん





「はあ、はあ……あっ
くうう……っ♥」

「どうしたのかな？何かを
必死に我慢してるけれど」



「ここをじんじんさせて
ここから、なにか
でそうなんじゃないか？」

「っ……………」



じわ...

「染み出てきたね
我慢しなくていいんだよ
ほら、だしてごらん」

「い、いやだ……っ
そんな事……」

「またそんなに意地を張って。
素直になれる様に手伝ってあげようね
ほら、いくよ？」





「上手に母乳出せたね
偉いよアリス」

「っ…………♡…………♡」



「あは……アリスちゃん
ぴゅっぴゅっで母乳出しながら
イっちやって可愛い♡」

「ちなみにあのおっぱいは
アリスちゃんの強さから
できてるんですよ」



「貴方達風に言うと、ミレベルミですかね？
ああやって出しちやう度に
彼女はどんどん弱くなっちやうんです」

「これからどうなっちやうのか
楽しみですなえ」

「……………」

アレスの容貌は、まるで悪魔の好みに作り替えられるかのように
少しずつ変わっていく。

それだけの時間が経っているのか、もしくは早くそうなる様、何かしらの術を
施されているのか……。ただ見る事しか許されない俺には確かめる術がない



「ん……んむ……つ、ちゅ……」



「ぶは……」

「さあ、教えた通りに言ってごらん」

「……………今日も、アリスの事を
たくさん可愛がって下さい」



「よく言えたね、偉いよ。そんなに私の寵愛が欲しいんだね」

「っ……お前が言えって……！」

「ほら、また品のない言葉遣いになってるよ。言いつけを守れないと君と、彼がどうなるか言ったはずだよ」



「……申し訳、ありません」

「素直に謝れて偉いね
じゃあ、まず今日はこの
敏感オッパイを使わせてもらおうか」



「ああ、最高だよアリス
君のおっぱいは極上の一品だね

「ありがとうございます……」

(こんなの、何がいいんだ……)





「もっと胸を寄せてチンポを
しごくんだけ、やってごらん」

「っ……どうですかっ」

「あーそうだ、上手いよ
上手いよ」

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

「もう出ちやいそうだよ
ちやんと精液オツパイで
受け止めるんだよ」

「は、はい……っ」

た
ら
ん

た
ら
ん

た
ら
ん



「あつ……でて……」



「アリスのオツパイが気持ちよくて
たくさん出てしまったんだよ」

「……………」
「……………」
「……………」



「そうそう、騎乗位というのは
そうやって腰を振るんだよ」

「ん、ふっ……くっ……っ」

「夢中で腰振って感じてるんだね
やはり戦いなれた戦士は
セックスの上達も早い」

「これは……」

命令するから……っ」





「意地っ張りな所も
嫌いじゃないよ」

「ほら、イキそうになってるの
自分でわかるかな？」

「教えた通りイク時は
ちやんとイクって言うんだよ」

「くっ……っ……イ、イキま……」



くっ
くっ
くっ

くっ
くっ
くっ

くっ
くっ
くっ

くっ
くっ
くっ

くっ
くっ
くっ

くっ
くっ
くっ

くっ

くっ



「うっとりメス顔して、そんなに
気持ちよかったのかな？」
「でも、言いつけは
守れなかったね。これは
お仕置きしないといけないな」





「ま、まって……いった
ばかりだから、今入れられたらっ」



「おっ、ほおおおおお.....っ♡♡」



「また言えなかったね。お仕置き続行」

「おっ♥だめっイキました、イキましたからあっ♥」

「後から言ってもダメだよ。
ほら、チャンス上げるから頑張って」



「マンコ締まってきたよ
ほらなんていうんだっけ？」

「イきますいきますっ、またイクっイクっ」



「ほー……っ♡ほーっ……♡」

「ちゃんと言えて偉いね。これからも
ちゃんと忘れずに言うんだよ」

「よく似合っているよ。」

さて、ご挨拶をしてください」

「アリスは、ご主人様の忠実な性奴隷です
このやらしい身体で、旦那様の情欲を
今日も思う存分発散してください」



「男を悦ばせる言葉もしつかり覚えたい
いいだろう。今日はまずケツ穴を舌で
舐めしやぶって貰おう」



「……………はい
ご主人様のお尻の穴…………アリスのお口で
清めさせていただきます」



知
り
な
い
わ
け
な
い

し
ん
じ
り
し
ん
じ
り
し
ん
じ
り

「んっ……ちゅっ」

「れる、ぴちや、ぴちやっ♡
ん、れるるるるっ♡♡」



「ケツ穴の奥もちゃんと舌で
キレイにするんだ」

「ふあい……♡」





「そんなに顔をうっとりさせて
ケツ穴舐めさせられて興奮してるんだね」

「う、うっとりなんて、してません
こんな事、屈辱です……っ」



「そろそろ射精そうだよ……
ほらアリス、ご主人様の精液を
無駄撃ちさせるつもりかな？」

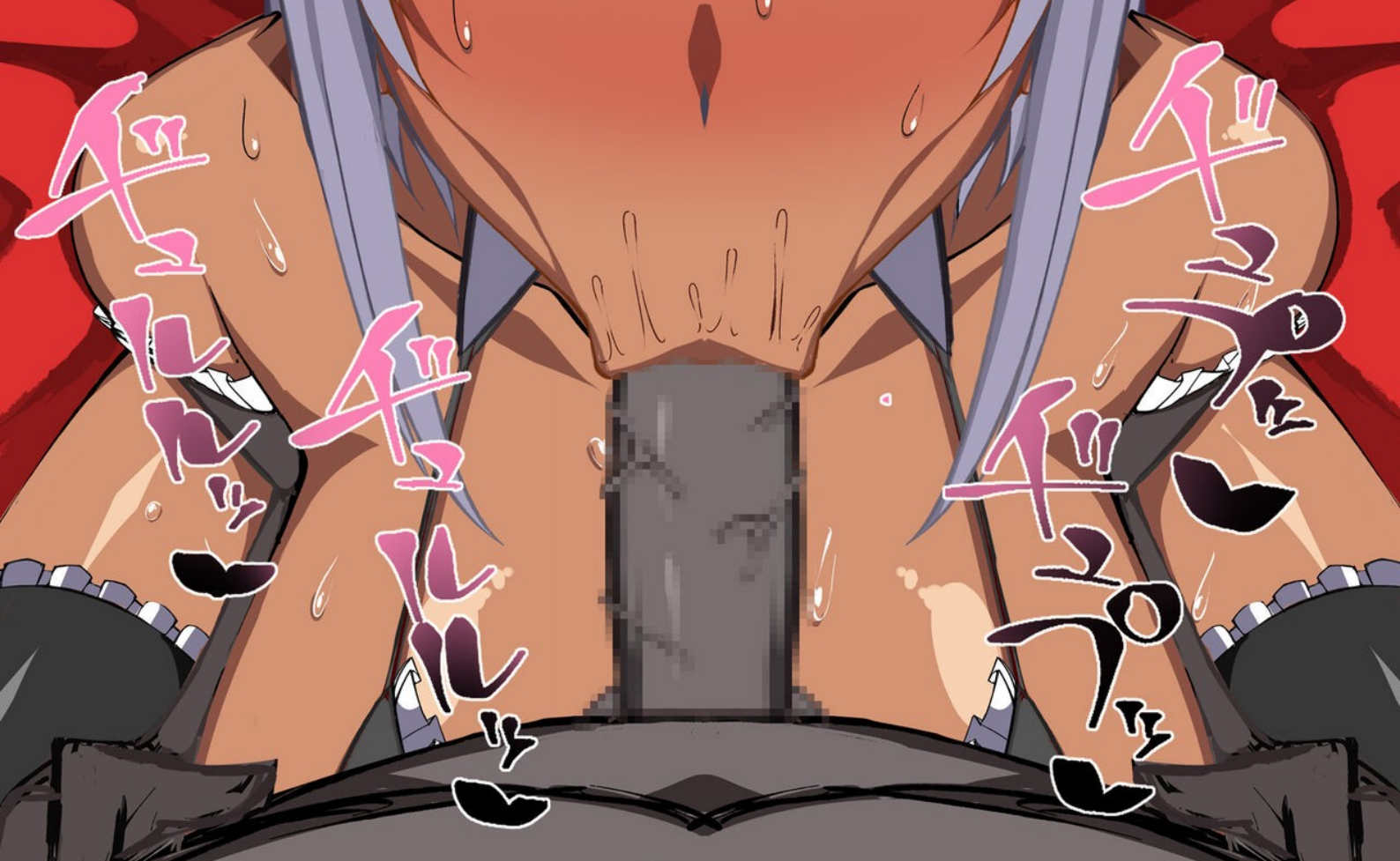
「は、はい……最後はしっかり
お口で搾り取ります……」

「それでは、失礼します……♡」



「んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

「そんな夢中になって
むしやぶりついて。余程
啜えたかったのかな」



「アリスの可愛いひよつとこ顔見てたら
もう出そうだ、全部飲むんだよ」



「んんっ……ん、んっ…
んくっ、コクツ♥」



んんっ
んくっ
んんっ

んんっ
んくっ
んんっ

んんっ
んくっ
んんっ

んんっ
んくっ
んんっ

んんっ
んくっ
んんっ

んんっ
んくっ
んんっ

んんっ
んくっ
んんっ

「ふー……♡ふー……♡」

「きちんとくつくんできたね。
上手くできた娘にはしつかり
褒美を上げようね」



「もうとろとろじゃないか
そんなに待ち遠しかったのか？」

「ち、ちが…そんなこと」

「遠慮しなくていい、
ほら、チンポ入れてあげるからね」

はーい

はーい

はーい



「おおおおオオツ♥
おっきいの入ったっ♥」

「入れた途端に締め付けてきたな。
フェラチオさせられて
オマンコ準備始めちゃってたのかな？」



「これが欲しかったんだらう？
膣内をデカチンポで擦られるの
大好きだもんね」

「やめっ、おおおおっ♡」

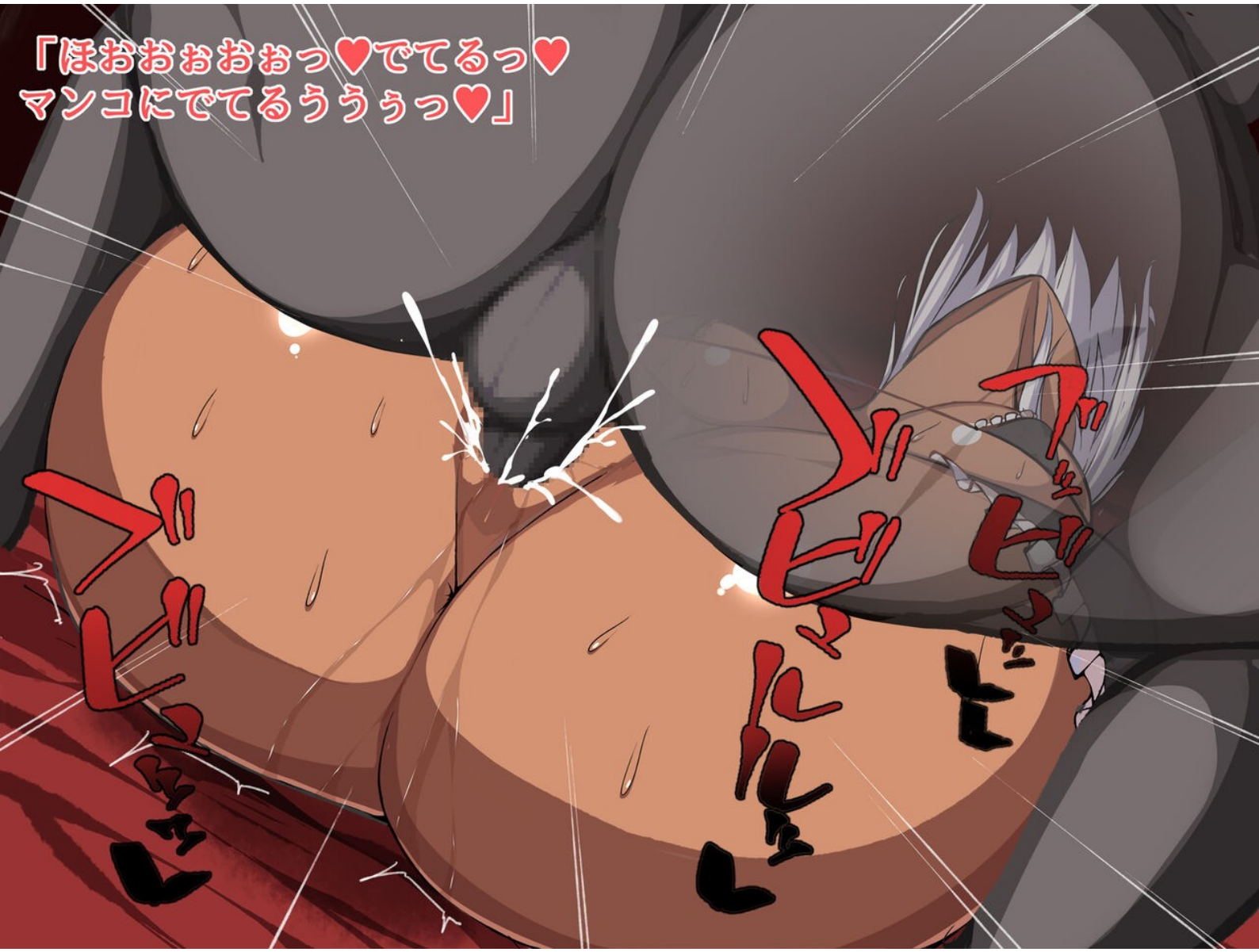


「あーでる。精液出してあげるから
ちゃんとマンコ締めなさい」

「はいっ♥はいっ♥」



「ほおおおおっ♥でてるっ♥
マンコにでてるうううっ♥」



「休んでいいなんて誰が言った？」

「ま、まってっもうほんとに
げんかい……イ……イ……イ……♡」



「いくらでも気持ちよくなって構わないが、ご主人様を満足させるのを忘れてはいけないな」

「ごめんなさいっ♡ごめんなさいっ
才あ' あああっ♡♡」



「好きなだけイクといい、アリスがイクところ
ちゃんと見てあげるからね」

「いきますっ♡いつ、インツインツ♡♡」





「イツツグウウウウツツ♥♥♥」

ヒョムン

ヒョムン

ヒョムン

ヒョムン

ヒョムン

ヒョムン

ヒョムン

ヒョムン

「ふー……ほら、奴隷の嗜みを
忘れてるよ？セックスが終わったら
ご主人様になんていうんだ？」

「ほー……っ♡ほー……っ♡中出し……♡
ありがとう、ございました……あ……♡」

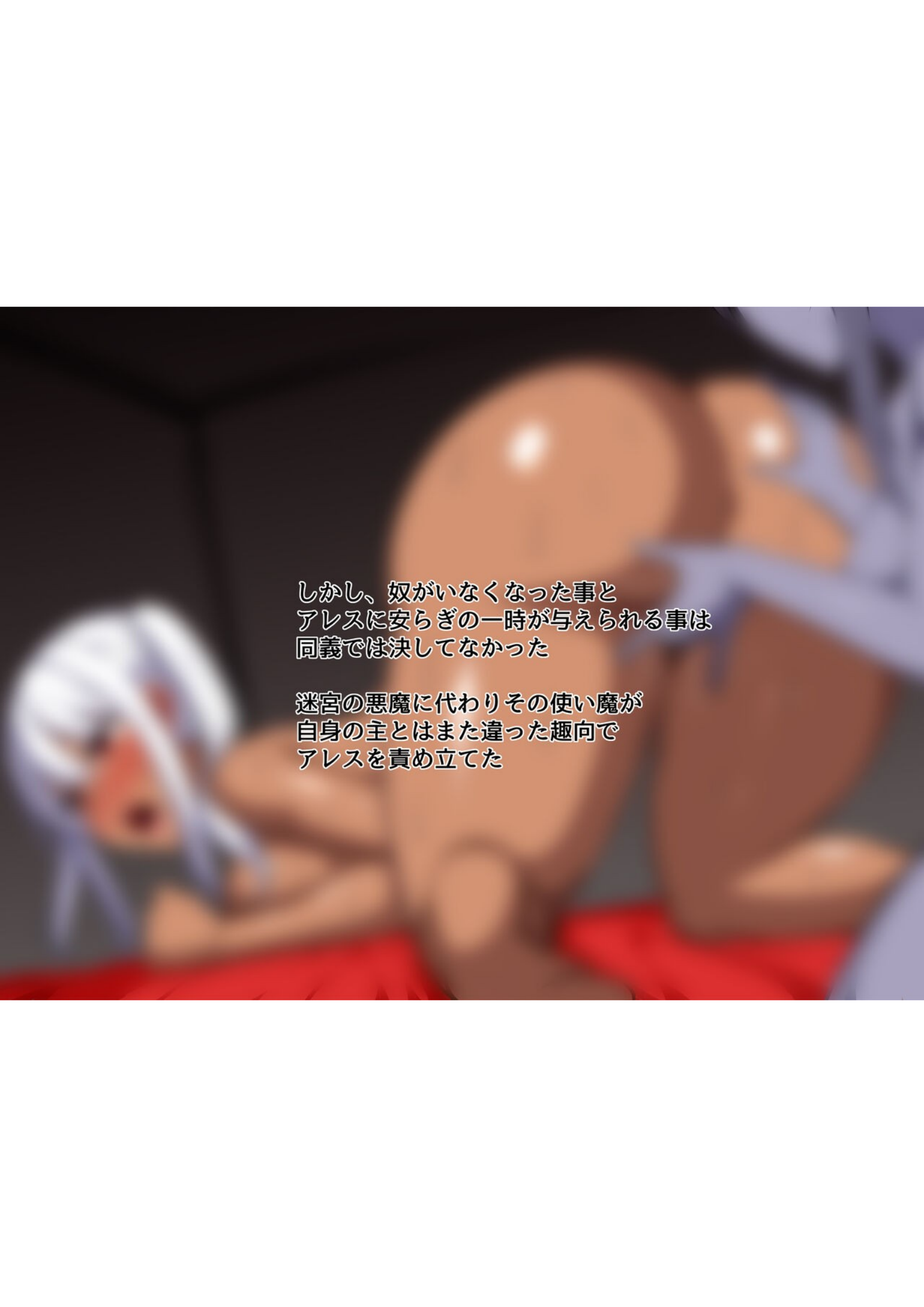




あくる日、突然迷宮の悪魔は
姿を消した

「ご主人様は大事な用があって
外出されています」

というのは悪魔の使い魔の談だ
アレスも同じように聞かされている



しかし、奴がいなくなった事と
アレスに安らぎの一時が与えられる事は
同義では決してなかった

迷宮の悪魔に代わりその使い魔が
自身の主とはまた違った趣向で
アレスを責め立てた

「く……っ、ふう、ふう
はあああ……っ♥」

「イキそう？ いったいそうなの？」

「あ、あああ……イ、イク……っ♥」



「はい、だーめ♡」

「え……っ」

「勝手にイっちゃだめですよ？
アリスちゃん♡」




「な、なんでこんな……」

「んー？ふふふ、アリスちゃんが
とっても可愛いから♡」

「い、意味が分からない……っ
今まで散々情けない姿を
晒させておいて……っ」





使い魔はアレスの快樂の度合いを巧みに
コントロールして焦らし、
その情欲を発散させる事を許さない

これがコイツの趣味趣向なのか



「どうでした？焦らされて

悶々しちやってるアリスちゃん
とつてもかわいかったでしょ」

「随分悪趣味なんだな、お前」

「ふふ、半分正解、半分不正解です
アリスちゃんがイケないのは私が
そうしたからじゃありません」

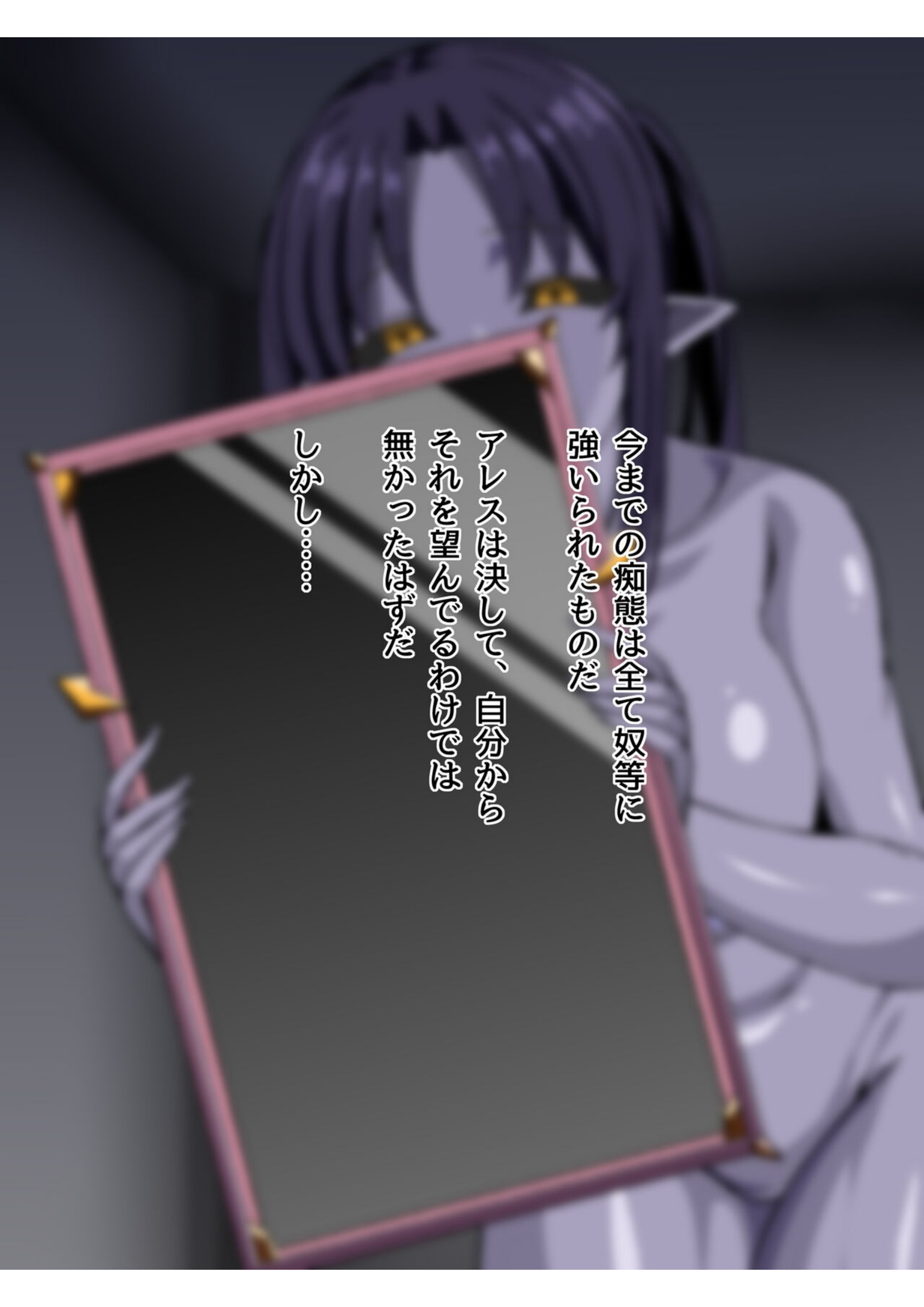
「彼女はもう、そういう身体になっっちゃってるんですよ♥」



「な……………」

「その証拠に……………ほら
アリスちゃんの様子を
見てみましょうか」





今までの痴態は全て奴等に
強いられたものだ

アレスは決して、自分から
それを望んでるわけでは
無かったはずだ

しかし……

「う、うう……はあ、はあ♡
あ、あつ…あんっ♡」



「はあ、はあ……♥
ダメだ……イケない
あと少し、なのに……」

「やっぱり……
アレじゃないと……」





「自分から気持ちいい事
しちやっってるアリスちゃん
可愛いですね♥」

「でもほら、私が言った通り
全然満足できてないでしょ？」

「今までの調教で、もうそういう
身体になっちやっってるんです」



「アリスちゃんを唯一
満足させられるのは……
なんだかわかりますよね？」

「明日にはご主人様
帰ってきますからね♥」



「やあ、ただいま
元気になっていたかな？」

「あ……………っ♡」

「嬉しそうな顔をして可愛いじゃないか
そんなに私に会いたかったのかい？」



「そ、そんなわけ……ない
二度と顔を合わせくなかったです」

「そうだな。自分を辱めた怨敵に
まさか、会いたがって何かを
求める者などいる筈がない」

「っ……………」

「しかしなアリス、私は君に
会いたくてしかたなかったんだよ」

「……嘘です、そんなの」

「本当さ、ほらその証拠に」



ドクン

「ほら、ご主人様の
チンポだ。ずっとこれを
待ってたんだらう？」

「あっ！♡♡あ、ああ……♡
はっ……♡はっ……♡はっ♡♡」



(ほ、ほしい……これっ♡
これほしいう♡チンチンほしいう♡)

「アリス、今日はお前の
新たな門出の日だ……フッフ」





「ほら、今からこれが
アリスの中に入るんだよ」

「ふーっ♥ふーっ♥」

「もう待ちきれないか
よしよし、大きいの入れてあげような」



「おおおおおっ♡♡」



「挿入されただけで
イってしまったか。まあ
仕方ない事だな」

「ほー……っ♡ほー……っ♡」

「大丈夫だぞアリス、
今日は君が満足できるまで
とことん付き合っやるからな」



「どうだ？久々のチンポの味は
私とのセックスの快楽を
再確認できるだろう？」


「きもちいい……っ♡気持ちいい♡
チンチンッ♡チンチンきもちいい♡」

「なら私の性奴隷になると誓え
この快楽を好きなだけ享受できるぞ」



「それはっ…………それはあ…………っ♡
アリスは、俺は…………っ相棒とっ」

(だろうな。強情な女戦士には
自分への言い訳が必要なものだ
最後の一押しをくれてやろう)



「生涯私に尽くすと誓うなら
お前の相棒を開放してやってもいいぞ
それも無傷でだ」

「え……っ」

「ほ、本当…ですか…？」



「二言はない
お前の意志の強さに
敬意を表し私も譲歩しよう」

「あ……ああ……っ♥ああっ♥」

ゴクゴクゴク

ゴクゴク



「な、なるうっ♥なりますっ♥
ご主人様の奴隷になりますっ♥
生涯お仕えしますうっ♥♥」

「よく言った、
褒美をくれてやるう
奴隷の証だ受け取れっ」

「くださいっ♥
エロメス奴隷マンコにッ
ドピュドピュしてくりやさいっ♥」

ドクドク
ドクドク
ドクドク

ガクン

ガクン

ガクン

ガクン



「これからは私に尽くせ、いいな」

「ごしゅじんさまあ……♡♡」

「あつ……♡気持ちいい♡♡

ねえご主人様っキス♡♡

キスしたいっ♡♡

「ああ、好きなだけ
キスしような」

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン



「いひめじんひやあ……♡
れるっ♡じゅぷっ♡れるれるるっ♡」





『사랑해...♥』

사랑해

사랑해

사랑해

사랑해

사랑해

사랑해

「それじゃ、お別れですね」



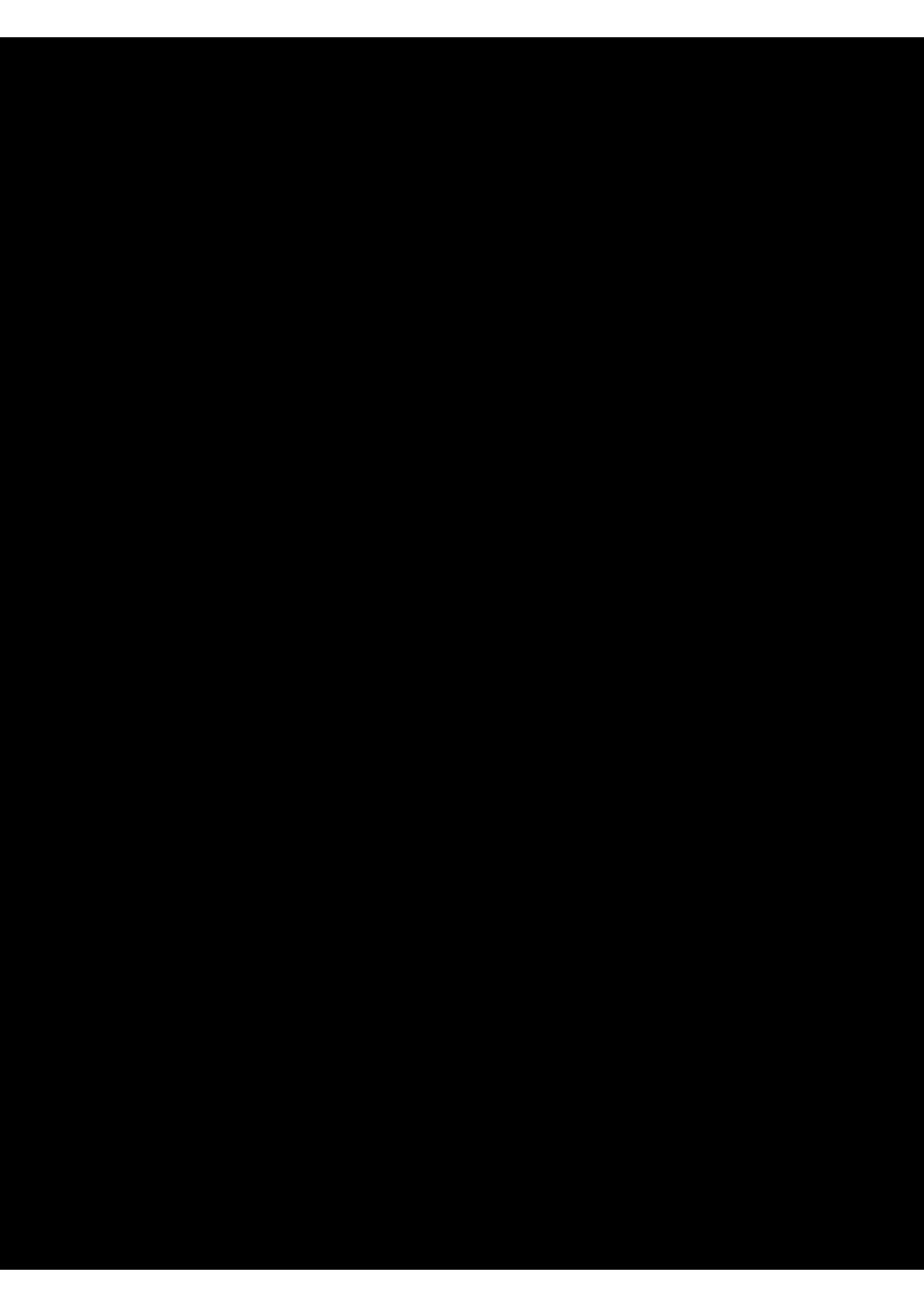


「さ、だんだん眠くなってきましたよー
目が覚めたら見知った場所にいると思うので
怖がらなくても大丈夫ですからね」



「アリスちゃんの事は心配しないでください
これからはご主人様の奴隷として
幸せに過ごしますからね」

「では、おやすみなさい♡
結構楽しかったですよ♡」



そして気が付くと俺は

迷宮の道程にある街道に立っていた

ここに送られたのだと、すぐに気付いた

アリスにはもう二度と会えなかった

そもそも会う気もなく、冒険者続ける

気力もなかった。

完全に心が折れた俺は

田舎に帰って、静かに暮らすと決めた

風の噂で何処かの街に美しい銀髪の

娼婦が現れたと聞いたが

もう俺には関係のない話だ